

メディアリタラシーとオープン教育

研究部長 名古屋大学助教授 浅沼 茂

私たちは学校の力を過信してはいないでしょうか。何か大きな事件や出来事があったりするとその主人公の出身や学歴が引き合いに出され、それがすぐに何かの因果関係があるかのように語られます。例えば、殺人鬼宮崎勤はどのような学校を出ているとか、海部新首相は何々大学にいたとか。どうして私たちはこのように学校のことを引き合いに出すことを好むのでしょうか。それは、私たちがあまり複雑な話よりも、ごく単純化された論理や因果律を好む性質の表れなのかもしれません。宮崎勤については、田舎からより都会の(?)高校に無理して入って、その雰囲気になじめなかったのが彼の劣等感を助長したというような話がマスコミに出たりしています。

殺人鬼宮崎の問題はそのような生い立ちや学校歴云々の問題ではなく、本質的に重要な教育問題を含んでいます。本質的に、彼にはメディアの内容を自分が選んでいて、それをコントロールしているのは自分であるということに気付く能力、すなわち、自己を対象化するという能力が欠けていたということが言えます。そのようなメディアをコントロールする能力を支えるものは、より基本的な判断力ですし、自己を見つめる反省的能力なのです。

さて、私たちは一方的に与えられた情報に頼りきってしまうこのような自分たちの姿について、振り返ってみるということを怠りがちなのではないのでしょうか。例えば、テレビ番組については、番組そのものは、ニュース、ドラマなどのように多様にあるように見えながら、実は非常に限られた選択肢です。これまでのテレビでは、本当に見たいものを見るというときには限界があります。それに対し、最近のビデオやケーブルテレビの普及は私たち自身の選択をある程度可能にできたとも言えます。けれども、私たちは本当に自分が見たいニュース、見たいと思うドラマを見てそのよしあしを判断することができるのでしょうか。メディアの発達した現代において私たちのしていることは、せいぜいタイトルを「選択」しているだけで、与えられた情報についての判断が欠けている場合が多いのではないのでしょうか。

ところで、このようなメディアの発達は、オープン教育の姿を暗示しております。テレビとの対比で言うと、伝統的な教育は、決められた番組を決められた時間にスイッチを入れ、チャンネルを選んでやっと思が見たいと思う番組を見るというやり方です。主体の側の選ぶチャンスも非常に限られています。授業の一回のチャンスを取り逃がしたら、学ぶチャンスは逃げていってしまうのです。一斉画一授業はまさにこの型で、学習者の主体的な選択の機会は限られたものでしかありません。それに対して、オープン教育の方はビデオ・ケーブルテレビなどのように選択の幅が大きく拡大し、いつでもどこでも主体の側が選ぶことができると言えましょう。オープン教育のオープンスペースとはまさに、このような自由空間のことであり、自由な自分の時間であり、その時間と空間を埋めていくのは、まさに学習主体であるということです。さらには、自らの創造的活動があります。そこでは学習ドリルをいつでも手にとることができ、また、お店やさんごっこや物づくりやお姉さんやお兄さんとの交流があり、およそそのような学習イベントを学習者が自分で作りあげていく場なのです。

オープン教育とはこのような場の提供であるということが出発点ですが、それだけではオープン教育のすべてではありません。このような場の提供に加え、その場の中で「なに」を「どう」判断するかということが問われます。それは単なる人マネではいけません。このような自由で未定の空間の中で、自分が自己の権威に基づいて判断をするという力が求められています。

オープン教育は、このように自由な空間において学習者が主体的に判断し、自分の経験を自分で構築していくという役割を自覚することを保障していくものなのです。ただしオープン教育はそのような器を用意するだけで、それが自動的に学習者の主体性の確立につながるというものではありません。器を用意すればすべてがうまくいくというのでは、それこそ単純化した因果律です。この器は単なる十分条件にすぎないということを忘れないようにしたいと思います。

第5回 全個教連夏季研修会開催

—新学習指導要領と個別化・個性化教育のあり方—

期日 平成元年8月23日～25日

会場 愛知県東海市勤労センター

今年の夏季研修会は、東海個性化教育研究会の全面的な協力により、名古屋から程近い東海市勤労センターを会場に行われた。残暑の厳しい中、全国から100名を越える参加者があり、一流の講師陣による6つの講演会を始め、分科会や実践校の見学、懇親会など、充実した内容の3日間であった。

前夜（8月22日）

・授業実践等のビデオ視聴

前日から宿泊している参加者のために、個性化教育の実践や関連のあるビデオの視聴会が行われた。

第1日（8月23日）

1. あいさつ 全個教連 染田屋謙相会長
東浦町教育委員会 高木省三教育長

2. 講演(1) 「個性化教育について」

上智大学教授 加藤幸次先生
新学習指導要領に「個性を生かす教育」という表記があるが、これは手段としての概念であって、個別化の側面である。これに対して、「個性を育てる」というのは、そのこと自体が目的であり、個性化の側面である。この二つをバランスよく保ちたい。

今までの授業は、自分の得意な分野を作ること（個性化の実体的概念）や自分なりの追求の仕方を作ること（機能概念）を、どういう形でどれだけ保証してきたか、反省すべきである。

3. 講演(2) 「自己評価の意味と意義」

名古屋大学教授 安彦忠彦先生
評価はすべて自己評価である。あらゆる評価には主観性が入るし、教育の評価は客観性よりも教育性が重要である。他者評価は手段として自己評価に従属的に位置づけることが大切である。

自己評価は自己教育の要である。自己評価は、自信と自省の習慣をつけることで個の確立につながる。

知識より知恵を育ててほしい。一斉・個別をバランスよく保つことである。両方において重要なものは、自己評価である。

4. 分科会

◇分科会A 「個性化・個別化教育の実際」

・発表 片葩小—小山先生
上野中—成田先生

個性化教育のつきたい力・育てたい力について、個別学習への疑問やティームティーチングの難しさについて、個性を育てるために、毎日の生活や行事ではどうしたらよいかなど、具体的な問題が出され、小山先生と成田先生の経験に基づいた話と参加者の意見交換が行われた。

◇分科会B 「個性化教育のためのコンピュータの活用」

・発表 池田小—細野先生
大磯小—館岡先生

コンピュータをオープンスペースに置き、個別学習のための学習材の一つとして活用した実践の発表があった。ネットワークにするとコースウェアの作成やハードのトラブルなど問題が多く現実的ではないこと、道具として子どもが主体的に使えるようにしたいということで意見が一致した。

◇分科会C 「個性化教育からみた生活科の展開」

・発表 緒川小—野村先生
松坂第一小—奥田先生

緒川小、松坂第一小の生活科に向けての取り組みの発表があり、年間指導計画作成の手順や時間数の確保、評価について、研究を継続していくための工夫など、これから生活科を展開していくうえで考えていかなければならない問題について、話し合われた。

◇分科会D 「中学校での個別化・個性化教育」

・発表 七宝中—大橋先生、奥山先生
六合中—中村先生



講演(5) M. クレメンツ先生

六合中より英語科における完全習得学習について、七宝中よりコンピュータを用いた学習指導について、それぞれ発表があった。学力差をどう取り扱っていくべきかということと、新しく導入が考えられている選択教科のあり方について、主に話し合われた。

◇分科会E「学習材の開発と研究」

・発表 卯ノ里小-角野先生
緒川小-加藤先生

学習材の開発について卯ノ里小、緒川小の実践が発表された後、学習材の役割と教師のかかわり方、個性化教育のねらいと学習材のあり方、子供の興味・関心を生かすために学習材の多様化が必要であることなど、一斉学習との違いが明らかにされた。

5.理事会

染田屋会長（全個教連）、高木会長（東海個教研）のあいさつ、高浦事務局長より本年度の経過報告に続いて、今後の活動計画と組織の充実・拡大について審議された。

6.懇親会

北から都道府県ごとに自己紹介をした後、和やかな雰囲気でも語り合い、楽しい一時を過ごした。

第2日（8月24日）

1.講演(3)「生活科の考え方・進め方」

国立教育研究所室長 高浦勝義先生
生活科は、社会科・理科の合科ではない。生活科のとらえ方や考え方一番のポイントは、すべての中心に自己の生活という視点をおくという点である。

生活科のねらいは、生活自立者を育成することである。この生活科の目標は、学校教育すべての目標と言える豊かなものであり、生活科は個性化教育の一部と考えることができる。社会科・理科の方法改善をめざす教科ではない。

評価はあせらない方がいい。

2.講演(4)「発信型教育のすすめ」

三重大学教授 織田揮準先生
今までの教育は、記憶学習的な情報を取り入れるのみの「受信型学習」だった。しかし、これからの教育は「発信型教育」でなければならない。子供たちが主人公となって、自分が得た情報を映像を通して発表し、批判してもらうのである。そのことによって、子供たちは興味深く意欲的に学習する。

教師が子供の発信を受信する立場になるような教育が必要である。

(ビデオ接写システムを使って、実際に作品作りの実演をされた。)

個性化教育のあり方

個性化教育研究会・個性化教育研究会



分科会C「個性化教育からみた生活科」

3.分科会

- ・分科会F…緒川小学校の見学
- ・分科会G…卯ノ里小学校の見学
- ・分科会H…七宝中学校の見学

4.講演(5)「グローバル教育について」

ニューヨーク大学教授 M.クレマツ 先生

グローバル教育は、地球上にはいろいろな宗教・文化・言語の人たちがいて優劣はないことや他との間でそれぞれが変化しているという事実を伝えることから始めたい。

愛知大学教授 魚住忠久先生

グローバル教育は、意図的に小さいうちから行う必要がある。個性化教育を進めながら、グローバルな視野をもった思考のできる人間を育てなければならない。

第3日（8月25日）

1.研修会のまとめ

北海道教育大学助教授 佐藤 有先生
聖路加看護大学助教授 浅沼 茂先生
東海個性化教育研究会 成田幸夫先生

2.講演(6)「新指導要領とコンピュータの役割」

岐阜大学教授 後藤忠彦先生

教育におけるコンピュータの利用の仕方は、教科内容の学習支援、学習の道具、実験・実習・測定制御等での利用、通信ネットワークの利用、資料活用の支援、印刷教材等の作成支援などが考えられる。

図鑑と組み合わせて調べさせたり、各地域の南中の瞬間を通信で調べたりした実践例がある。

コンピュータで使う教材は、数分の準備で数時間の学習に使えるようなものでなければしょうがない。

3.閉会のことば

板橋区教育委員会 新井 久先生

〈夏季研修会参加者の声〉

昨年度の意見から、今年は夏季セミナーが合宿という形になったそうですが、何だか缶づめにされているような感じもしないではありませんでした。しかし、他の先生方との一体感も生まれませんでしたし、時間も結構有効に使えたのではないのでしょうか。来年度は更に成田先生が言われたように、研修の個性化を図っていけばおもしろいですね。

福岡県 中野健治先生

“聞く”ことが多い研修会で、それは大変参考になったが、参加者による発表の場が少なく残念。次回からは、事前に参加者の研究や意見などの発表を募集して、それに対して全国の先生方から評価をしていただく、というのはどうだろうか。全国の多くの方々と交流を深められたことは非常によかったと思う。多くの点で得るものが多い研修会であった。

教育環境研究所 有賀八重子先生

研究会・研修会のご案内

第10回関東地区研究会
テーマ 「教育評価の今日的課題」
——エリオット・E・アイズナー氏
と語る——

(スタンフォード大学教授)
(全美教育学会副会長)
(世界美術教育学会会長)

期日 平成元年11月19日(日)
時間 午前10時～12時
会場 上智大学 7号館
11階 第2会議室
交通 JR・地下鉄丸ノ内線
四ツ谷駅下車徒歩1分

※参加される方は、事務局までご連絡ください。

会報第12号、会誌「個性を育てる」第3号の「研究発表会の案内」のうち、福岡県久原小学校の研究発表会に関する記事は、本連盟の誤りでした。取り消させていただくとともに、お詫び申し上げます。

また、愛知県卯ノ里小学校の研究発表会期日を下記のように、ご訂正ください。

正 平成2年2月8日(木)

事務局だより

今年度の夏季研修会では、東海個性化教育研究会の皆さんにたいへんお世話になりました。研修会の報告を速報で毎日出されたのには、驚きとともにエネルギーを感じました。全国個性化教育研究連盟の活動を進めていくうえで、たいへん心強く思いました。来年の夏季研修会は、九州地区を予定しています。今から楽しみです。

現在も、各地で個性化教育研究会が誕生しようとしています。全国個性化教育研究連盟では、個性化教育の普及と発展のために、このような各地方での活動を全面的にバックアップしていきたいと思っています。

本連盟では、全国各地の教育実践・研究に関する情報交換のために、主に次のような活動を行っています。

- ・会報の発行(個性化教育に関する最新の情報・研究会・研修会の案内・報告等、4ページ、年3回発行)
- ・会誌「個性を育てる」の発行(会員の主張、授業実践等、約70ページ、年1回発行)
- ・夏季研修会の開催(本年度は東海地区で開催)
- ・各地区研究会・研修会の開催
- ・研究・実践書の編集等

今後の活動について、ご意見・ご希望などございましたら、ぜひ事務局広報担当までお寄せください。

また、第12号でお知らせしましたように、今年度もたくさんの学校で、研究発表会が開かれます。各研究発表会に参加されたご感想なども、お待ちしております。

本年度の会費(個人2000円、団体5000円)
未納の方は、至急納入願います。
口座番号東京0-194394
加入者名 全国個性化教育研究連盟

〈事務局への問い合わせ・連絡先〉

〒236 神奈川県横浜市金沢区泥亀2-3-1-203
事務局長 高浦勝義
(自宅) ☎045-783-7497
(国立教育研究所) ☎03-714-0111
〒114 東京都北区田端1-10-2-201
広報担当 望月桂二
☎03-822-1366